ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　僕……詠は、ロランの話を何も言わずに聞いていた。

　いや、違うでしょうね。『何も言わなかった』のでは無く、『何も言えなかった』のではないでしょうか。

　ここで、この『ワルキューレ』で、自分以外の誰かの『研修所』時代の話を聞くのは初めてで、正直、聞いてしまっていいのか、僕はロランが話し始めるその寸前まで迷っていました。

　別に、あの場所の話をしてはいけない決まりはありません。それでも迷ってしまったのは、僕にとって『研修所』での生活が、そんなに楽しいものでは無かったから。

　分かっています。この気持ちは、『ロランを気遣って』とか『ロランを心配して』とか、そんなものじゃ無いことは。僕が、僕自身が、単にあの場所でのことを記憶の隅へと追いやりたいだけ。ただ自分が嫌なことを思い出したくないから、ロランに話して欲しくないってだけなんです。

　さっきロランは、「ありがとう」って言ってくれましたけど……そんな風に言われる資格は、僕には無いんですよ。

　だって僕はロランの話を聞いて、羨ましいって……あまり認めたくはないけど、嫉妬しているんですから。

　でも、僕がどう感じようが……ロランにとって、ロランの『研修所』での生活は、昔はずっと残しておきたい思い出で、今はきっと忘れてしまいたい記憶なんでしょう。

僕がどうして『研修所』に入ったのかは、実は自分でもよく分かっていません。ただ、物心がついた時にはもう、あそこで生活することになっていました。だから勿論、自分の両親がどのような人物なのかは知りません。それに、ロランや他の子みたいに、絶対ここに入るって決めた『チーム』があった訳でもありませんでした。

ここ、『ワルキューレ』に入ったのだって、大した理由なんてありません。ただ女性率が高いと聞いて、ここに入ろうと思いました。自分の容姿が女性っぽいのは充分理解していましたから……もしかしたら、同じような人がいるかも、と期待していたのかもしれませんね。

自分のこの容姿は嫌いでした。いえ、今も正直、あまり好きではありません。

のせいで、研修所では僕には友達はおろか、話しかけてくれる人もいませんでしたし。

別に、いじめられていた、というわけではありません。でも、ずっと独りだった。

　だから、『友達と呼べる人がいた』、それだけで僕はロランが凄く羨ましい。例え今は、敵同士だとしても、憎しみをぶつけあう人だとしても、『そういう人がいる』ってだけで、僕にはそれが凄く遠く思えてしまう。

　ここに来て、初めてちゃんと言葉を交わせる人に会えました。もしかすると、同じチームにのメンバーなのだからやむを得ず、だったかもしれません。

　それでも、僕は嬉しかった。自分が勝手に思っているだけかもしれないけど、レイ、樹葉、ロランという、初めて『仲間』って思える人が出来たこと。僕にとっての夢というか、ずっと欲しかったものが手に入ったから。ずっと一緒にいたい、離れたくないもっと色んな事を話したい、そんな……絶対手放したくないって思える人に、初めて出会えたんです。

　ロランは隠しているつもりだったかもしれませんが、ロランと僕達との間に、透明で、でもとても分厚い壁があったことは皆知っています。それが僕にはとても悲しかったし、どうにかしたいと思っていました。

　ああ、そうか。

　もしかしてロランは……怖かったんですか？　『友達』だと思っていた人に、また裏切られる事が。

　そんな訳……

「……どうした？」

「ロラン」

　言いましたよね？　「僕達が離れ離れになってしまう、そんな恐怖を感じた」って。

　怖いのに……裏切るはず無いじゃないですか。

　僕はずっと一緒にいる。ずっとそばにいる。時には喧嘩することもあるかしれませんけど、それでも僕は絶対、ロランの傍からいなくなったりしません。

　だから……

　質問には答えない。でも代わりに、僕はそっと、ロランの、テーブルの上に置かれた手に、自分の手を重ねた。

　重ねられた詠の手を、俺、ロランはジッと見つめていた。

　数度視線を上に動かすと、その手の主と目が合う。

　何を伝えようとしているのか理解するには、今の俺と詠との信頼関係ではまだ無理だ。

　それでもきっと、詠が伝えようとしていることは……悪いものじゃないんだろうってことくらいは分かった。

「あらあら～？　なーんか二人、いい雰囲気？」

「あのレイちゃん……一応二人共男の子なんだからさ、まるで『初々しいカップル』みたいな言い方はちょっと――」

「えっと、樹葉。『一応』じゃなくて、僕は男子ですからねっ？」

　なんて軽口を叩きながら、俺の手の上に重ねられた詠の手の上に、樹葉、レイの順番で二人も手を乗せてくる。

　重い。

　でもこの重さが、今はとても心地よく思えた俺だった。